

フランス語初級の授業について ——会話中心の展開

人文学部人文学科
国際コミュニケーションコース

岡本克人

はじめに

昨年度より、フランス語初級の授業において会話を中心にすえた展開を試みている。もう少し正確にいうと、おそらく相当に長い歴史をもつ文法と読本というきちんと2種類に分断された形をかなり弱め、読み、書き、話し、聴くという行為がまんべんなく行われるよう、会話面を従来よりはうんと重視し、すべてが会話から始まって会話に集約するような授業形態を求めている、ということである。実際にはこのような授業を昨年になって急に始めたわけではなく、かなり長きにわたる教育経験と、社会的状況の変遷によって、次第に醸成されたものである。

社会的変遷というのは、ひとつには外国語が西洋の文物を学ぶための教科書のような役割をほぼ終えて、国際間の相互的なコミュニケーションを果たす手段に変わってきたことをさす。今の大学生は海外旅行等の経験があるものが多く、この数は増える一方のようである。「ふらんすはあまりに遠し」ではなく、昔に比べるとフランス(あるいはフランス語圏)もかなり身近にあるといえる。衛星放送があるので、その気になれば毎日最新のニュースを生で見られるし、インターネットでわずかに数十秒でフランス、カナダ、スイス、ベルギーなどのサイトに達し、スキー場のロッジはどこにあり、今宿泊料金はいくらなのか、あるいは犬の愛好家クラブがどこにありどんな犬が好まれているかというようなことまで写真入りで分かってしまう時代である。いうまでもなく文化は雑多な項の集合体であり、文化が一流の文学書や哲学書のみを通じて入ってくるのではなく、視聴覚すべてに訴えかける総合的なかたちとして流れ込み、またこちらからも容易に発信できる時代になった。

また、これはあまりありがたい変化ではないが、学力低下の傾向があることについては、いたずらに迎合することはないが、学生抜きの授業はありえないのだから、学生の要求や資質をよく見極めてできるだけのこととはしなければならないだろう。フランス語に興味がないわけではなく、ほどほどには出席する者、また数は多くないが非常に熱心

に取り組む者がおり、この総体をどう教育するかが、むずかしいが努力の必要などころである。学生の能力に多少かげりがあっても、とにかく時代に応じた授業展開が必要であろう。

以下に記す授業プログラムは今まで実際に行ってきたものに基づいたもので、紙上の実験ではない。これをひとつのモデルとして提示し、フランス語教育に携わる人々の参考に供するのが目的である。

1. 会話の意義

会話、あるいは発声を中心にするのは、実は会話そのものができるようになることだけをねらってではない。言語習得の基礎はやはり音声であるし、ギリシア語やラテン語でさえ、声に出してみないと、何かつかみ所がなくなってしまうのは言語の本質を暗示している(近年文字論が唱えるように文字面をもっと重視した言語論が必要であるが、これはまた話が別である)。いわゆるダイレクトメソッドほど極端なものは問題が多すぎるが、ほどほどに会話を核にして外国語を学ぶのは理に適っている。外国語を学ぶことにおいて天才ぶりを発揮したシュリーマンはこのことを十分に心得ていたようだ。ロシア語を学ぶ際には一言もこの言語を解さないユダヤ人に金を与えて聞き手にならせる、ということまでやった。またあまりに大きい声で勉強するので、他の間借人から苦情が出て、ロシア語を学習中に二度も住居を変わらねばならなかった。シュリーマンの場合は独学ではあるが、擬似的に会話の状況を作ったといえよう。

たとえばフランス語の不規則な動詞の活用を *je* のところから表にしたがって覚えていくのはかなり効率が悪く、学習意欲を大きくそこねる。これは表に整理するとそうなる、というだけの話で、実際の会話において、あるいは読んだり書いたりするときもだが、活用表を思い浮かべながらやるわけではないことは言うまでもない。会話においては、特に入門のレベルでは、*je* と *vous* のところが身につけば十分だろう。二人がお互いのことを述べることが多いわけだし、音声的には他の人称も引き出しやすいので、最初は多少の間違いは気にすることはないだろう。'écrire'なら *j'écris* と *vous écrivez* になるわけだが、*tu* と *il* は *je* のところと同じ音だし、*nous* は *vous* から引き出せることにやがて気づくだろう。*ils* は **ils écrit* などと言ってしまふかもしれないが、学習をやめさせなければ何らかの形で修正する機会が自然に訪れるものである。

代名詞の語順は他の要素と全部組むとかなり大きい表になって、これを考えながら誰も話すことはできない。ていねいな説明を一度はしなければならぬが、そのあとは、表を丸暗記するよりも、最初はごく短い文が咄嗟に出るように何度も言わせることの方が大事である。多少の欠損があっても、これもだんだん埋まっていくであろう。最初に身につけさせるべき表現の例は次のような簡単なものである。

Je t'aime.

Je ne l'aime pas.

Vous lui parlez.

Vous lui donnez un livre?

Donnez-moi ce stylo.

Aidez-moi. etc.

否定形で複合過去形、しかも二つの代名詞を使うというような難しいものはずっとあとまでやらなくてもいいだろう。フランス人と日本人を親にもつ児童が日本人も目をまわすような、(日本語の)長い複雑な言い回しを訂正され、練習させられるところに偶然出くわしたことがあるが、これは外国人の勝手な思い込みによる過剰な学習である。同じようなことをしていないか、気をつける必要があるだろう。

会話は相手というものがいるので、さまざまな印象が生まれる。学生同士が、

Vous venez d'où?

-- Je viens de Kagawa.

などの会話をすると、ここで用いられたフランス語は命を吹き込まれたようになる。愛媛だと思っていたが、香川だったのか、という実際的情報は、架空の、Anna はポーランドから来た学生です、などという練習用の文とは全然インパクトが違う。日本人同士の仏会話には抵抗があるだろうが、これもすぐに慣れてくるし、将来思いがけない国の人とフランス語で話すこともあるので、これはよい訓練になる。

Vous aimez quel sport?

-- J'aime le judo.

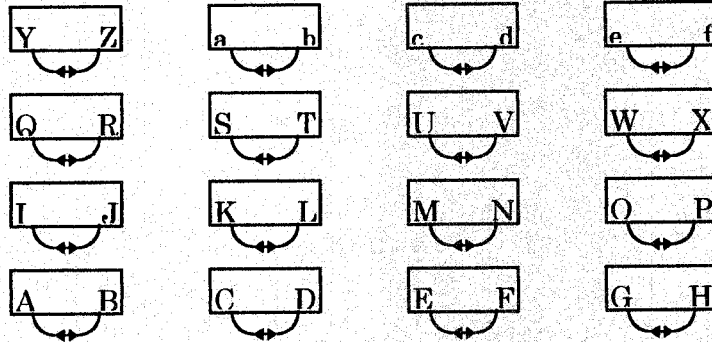
というような会話も学生同士お互いを知るよいきっかけにもなるだろうし、そもそもそういうことのために人間は会話をするのではなかったか。

問いかけても、相手にされない場合とか、妙な答えが返ってくる場合も考えられるが、こういうことに適切に反応できるのも外国語の能力のひとつである。

2. 授業の具体的展開

会話を中心にした授業が効果的ということが分かっているにもかかわらず、一般に実施されないのは、学生数が多くて教師ひとりで対応することが困難だからであろう。しかし学生数が仮に20人、あるいは3人ぐらいになっても学生が受動的な場合はさして状況が変わらないことも見落とせない事実であるし、ここはなんとか学生が一度でも多く発声する機会を工夫して設けなければならない。この目的にそった効果的な授業展開のいくつかのパターンを以下に提示する。

● 隣同士のパターン



教卓

学生は席が決められていない場合、大体仲の良いものどうしですわっているものである。したがって、隣同士 A, B はコミュニケーションをしやすい状況にある。これを用いてごく短いことばのやりとりを何度もさせる。

Qu'est-ce que c'est?

-- C'est un livre. (table, stylo, gomme, crayon, dictionnaire, cahier, etc.)

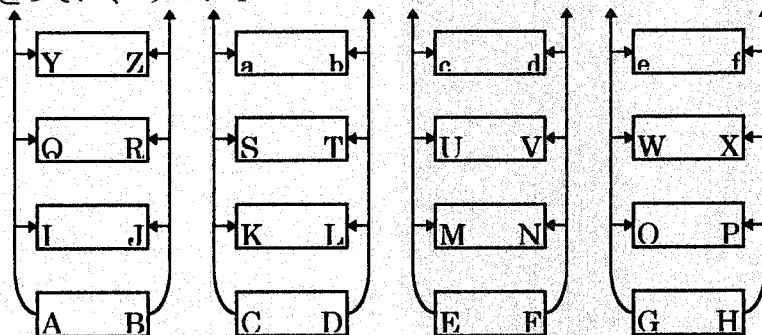
机上有るものはよい材料である。直接目に触れ、手に取ることができるものであるから、十分に発音の練習をさせておき、新しい文法事項が出てくるたびに幾度も用いることができる。

Je vous le(la, les) donne. (と言いながら、机上の何かを相手に渡す)

-- Merci. (と言って受け取る)

こういうゲームめいたものは教室に活気を与えるし、赤ん坊がしかめっ面をして母語を身につけるのではないことを思い起こせば、決してばかばかしいことではない。その反対である。一方が質問者の役割を一応終えたら、交代して、こんどは返事をすることになる。その辺は学生に自由にさせればよいだろう。

● 後方へ送っていくパターン I



教卓

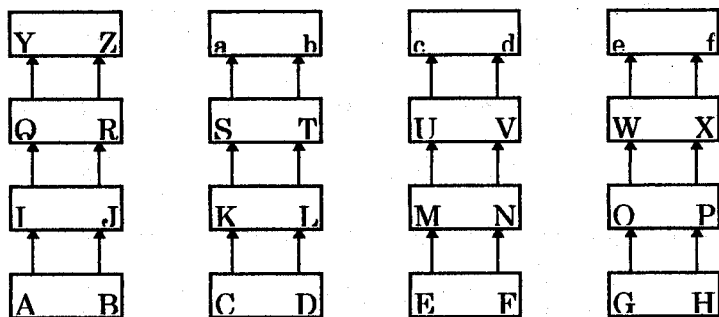
一概には言えないが、教室の前方にはフランス語を熱心にやろうとする学生が座ることが多い。少なくともフランス語がかなわないのに最前列に座るといようなことはない。したがって前方の学生に一種のリーダーシップを取らせ、また後方で遠慮している学生には心理的圧迫を与えない形で皆に練習させるために、この方法がよい。最前列に座っている学生には十分に質問となるフランス語の練習をさせておき、残余の学生には返答の部分の用意をさせる。

Quel âge avez-vous?

--J'ai dix-neuf (vingt, vingt et un, etc.) ans.

質問をした学生は何度も何度も練習できるわけだが、返答する学生も聞くことは聞いているので、やはりよい訓練になる。通常はこれだけでは、少し時間があるし徹底しないので、前方の2列目や3列目の学生に同じことをさせる。このときは当然ながらすでに質問をして歩いた学生は返事をする側にまわることになる。

● 後方へ送っていくパターンII



教卓

このパターンはIのヴァリエーションのように見えるが、返答したものがすぐに質問者になる点が大きく異なっている。このやり方はかなり難しく、場合によってはこの流れが止まってしまうおそれがあるので、内容は単純で、文構造も最も基本的なものにする。

Quand est-ce que tu rentreras?

--Samedi prochain.

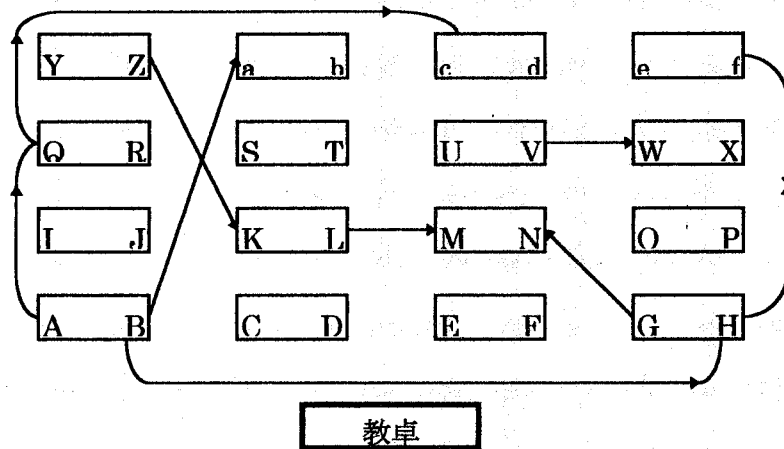
というやりとりなら、

Tu rentreras?

-- Oui.

ぐらいまで簡単にしないと、先に送れなくなってしまう。また未来形語尾の-ras に意識を集中させるには、こういう簡略化が必要である。

●アットランダムなパターン



これは要するに立ち上がってどこへ行ってもいいことをあらわしているのだが、このパターンにはいろいろヴァリエーションがあり、状況によって使い分けたほうがよいだろう。

- ◎ 積極的、活発なグループを指定して(前列の横方向だけでなく、特定の縦方向にそのような集団が発生することがある)自由に歩かせ、やや長めの発言をさせる。

Je voudrais réserver une chambre pour 2 personnes...

-- *D'accord Mademoiselle.*

- ◎ 空間の許す限り多くの学生をたたせて自由に誰とでも話させる。座っているものに話し掛けるだけでなく、立っているものどうし、出会い頭にとっさに反応させるようにする。

Bonjour Monsieur (Mademoiselle, M. Tanaka, Mlle. Yamada, Taro, Hanako, etc.)

-- *Bonjour Monsieur (Mademoiselle, M. Tanaka, Mlle. Yamada, Taro, Hanako, etc.)*

またこれは文構造自体は単純だが反応が難しい会話の練習に有効だろう。次のようなものは、理屈だけでは対処しきれないだろう。これには事前に十分な説明が必要なのは言うまでもない。

Vous êtes Japonais?

-- *Oui, je suis Japonais.*

Vous n'êtes pas Chinois?

-- *Non, je ne suis pas Chinois.*

Vous n'êtes pas Japonais?

-- Si, je suis Japonais.

おわりに—成果

この会話中心の授業による客観的評価は心理学的実験のようにやるわけにいかないから、難しい。しかし、じっと座っているだけの授業から動き回って単純でもちゃんと実際に即応している会話をクラスメートとする授業への変化はそれなりに成果を上げているのではないかと思う。何よりも教室は生き生きと活気にあふれた感じになるし、こういってはなんだが、あまり外国語をやりたくない学生もその能力と意欲に応じて学習できる点もよいのではないだろうか。近年、実用フランス語技能検定試験の受験者は地方の大学としてはかなりの数になり、昨年度の初級のクラスから思いがけず3名の四級合格者も出た。過去を振り返ると、まず受験させること自体が難しかったのである。

会話から入って、フランス語全体にだんだん熱心になる学生もおり、大変な量のフランス語の夏休み日記を提出する者もいる。ことさらに仏作文というと、抵抗があるのだが、自由に自己を表現できるとなると、相当に時間がかかっても長いものが書けるのである。Bonjour. Ça va?のような短い表現でも実際に口で使ってみることにより、そういう能動的な学習態度を生むきっかけになりやすいと、考える。必ずしも、すぐに成果らしきものが出ない場合も、まずは実際に外国語を使うことに興味を覚えさせておくことは長い目でみればよいのではなかろうか。

平成9(1997)年9月30日受理

平成9(1997)年12月25日受理

